

有機, 減農薬および無農薬農産物に対する消費者の意識

八尾 充 睦・富 沢 章*

Mitsuyoshi YAO and Akira TOMISAWA* :
A point of view from consumers on organic,
chemical-less and chemical-free crops

近年, 食品の安全性に対する要求が高まり, さらには, このような安全志向に加えて健康志向, 本物志向, こだわり志向¹⁾が強くなるなど, 消費者のニーズが多様化してきた。こうした消費者ニーズの高まりを背景に, 「有機」「無農薬」「減農薬」などの農産物が増加している。

このような状況をふまえ農林水産省では, 平成3年度から防除多様化推進事業を発足させた。この事業は, 病害虫の多様な発生様相に応じた, 多段階の要防除水準を設定することを主な目的とし, 水準の設定に当たっては, 消費者のニーズを反映させるものである。石川県でも平成4年度からこの事業に取り組んできたが, 消費者ニーズを反映した要防除水準を設定するために, まず消費者ニーズを把握する目的で, 減農薬・無農薬農産物に対するアンケート調査を実施した。以下にその概要を報告する。

本文に入るに先立ち, アンケート調査に快く協力して頂いたジャスコ野々市店, 石川生活協同組合および宇ノ気町農業協同組合(現, 石川かほく農業協同組合)に対してお礼申し上げる。また, 金沢市在住の保育園児をもつ人々に対して質問用紙の配布と回収に協力して下さった, 金沢市三口新町の高田慈之氏, 金沢市桜町の白川郁栄さんには心よりお礼申し上げる。

調査の方法

1. 調査時期および調査対象者

調査は, 平成4年10月にジャスコ野々市店内の買い物客(以下, 大型店)と石川生活協同組合員(以下, 生協)に対して, 平成5年11月には宇ノ気町農業協同組合職員(以下, JA職員)と金沢市内で保育園児をもつ人(以下, 一般市民)に対してそれぞれ実施した。

2. 調査方法

質問事項を記入した調査用紙(第1, 2表)を配布し, 記入後回収, 集計した。なお, 平成4年10月に実施した対象者には, 年齢と農業経験の有無についても記入を依頼した。

結果および考察

1. 調査対象者の年齢および農業経験の有無

大型店と生協における調査対象者の年齢構成と農業経験の有無を第3表に示した。総回答者数は大型店で258人, 生協では38人であった。調査に協力頂いた方々の年齢は, 大型店と生協とも20代以上で, 年齢構成は30~40代が過半数以上であった。大型店では農業経験者の方が多かったが, 生協では農業経験を持たない者の方が多かった。JA職員と一般市民に対して実施したアンケート調査の集計人数は第5表に示すようにJA職員が22人, 一般市民が29人であった。

2. 野菜を買うときのポイント

消費者が野菜を買うとき, どんな基準で選択するのかを知るために行ったアンケート調査の結果を第4表に示した。大型店, 生協とも概して, 新鮮さ>価格>有機等の農産物, の順であったが, 生協では大型店より有機等の農産物を重視する傾向がうかがえた。年齢別では, 30代と40代が価格を重視する傾向がみられた。また, 減農薬や無農薬農産物に対する関心の度合いを知るために調査したところ(第5表), 関心があると回答した人は, JA職員で約64%, 一般市民では約93%であった。このように実際に買うときには, 新鮮さや価格の方が重視されるが, 減農薬や無農薬農産物に対する消費者の関心は, 概して高いように思われる。

3. 減農薬や無農薬農産物の購入状況

(1) 購入頻度

減農薬や無農薬農産物の購入頻度について調査した結果を第6表に示した。大型店では, 積極的, ときどき買う, 1~2回買った人の調査者全体に占める割合は概ね

石川県病害虫防除所 Ishikawa Plant Protection Office,
Kanazawa, Ishikawa 920-01

* 現在 小松農業改良普及所 Present address : Komatsu
Agricultural Extension Station, Komatsu, Ishikawa 923

第1表 調査用紙の内容(大型店と生協)

質問事項	回答区分 ¹⁾
野菜を買うときのポイントを次の中から選んでください(複数回答可)	①新鮮さ ②価格 ③見た目のよいもの ④産地 ⑤有機等の農産物
無農薬や有機農産物の購入頻度を教えてください	①積極的に買う ②ときどき買う ③1~2回買った ④買ったことがない ⑤わからない
あなたが考える減農薬・無農薬農産物の品質と価格についてお聞きます ①見た目が悪くなったら ②味が悪くなったら ③大きさが小さくなったら ④普通栽培と同じ品質なら	①安くすべき ②同じでよい ③高くすべき " " "
減農薬・無農薬農産物が普通栽培のものより高くても買いますか	①5割高でも買う ②3割高でも買う ③2割高でも買う ④1割高でも買う ⑤高ければ買わない
(以下、生協組合員のみ) 農薬の使用に対する考え方を教えてください	①農薬の使用は仕方がない ②見た目が悪くなるだけなら使わない ③一切使用すべきでない ④わからない
農薬の危険性に対する考え方を教えてください(複数回答可)	①作物に農薬が残っている ②虫や雑草も殺すので人間にも害がある ③発ガン性がある ④必要以上に農薬を使っている ⑤あらゆる小動物も死ぬので自然を壊す ⑥使用基準を守れば悪いことはない ⑦よくわからない

注1) 回答は、回答区分の中から該当するものを○印で選択した

第2表 調査用紙の内容(JA職員と一般市民)

質問事項	回答区分 ¹⁾
減農薬や無農薬農産物に関心がありますか	①関心がある ②関心はない
農薬散布と価格について教えてください	①無農薬なら割増価格でも買う ②減農薬(1回散布)で割増価格でも買う ③適正散布のものでよい ④価格が高くなるなら買わない
減農薬や無農薬農産物を購入する際の不都合な点や心配な点は何ですか(複数回答可)	①販売店がどこにあるかわからない ②直接農家から購入できない ③本当に無農薬か心配である ④農薬の散布回数等の表示がない ⑤見た目が悪い ⑥特になし

注1) 回答は、回答区分の中から該当するものを○印で選択した

第3表 大型店と生協における調査対象者の年齢構成と農業経験の有無

区分	農業経験の有無	調査対象者の年齢					合計
		20代	30代	40代	50代	60代以上	
大型店	有	19人 (13.3)	38人 (26.6)	34人 (23.8)	29人 (20.3)	23人 (16.1)	143人 (100)
	無	18 (15.7)	44 (38.3)	21 (18.3)	18 (15.7)	14 (12.2)	115 (100)
	小計	37	82	55	47	37	258
生協	有	2人 (18.2)	3人 (27.3)	4人 (36.4)	0人 (0)	2人 (18.2)	11人 (100)
	無	3 (11.1)	11 (40.7)	9 (33.3)	3 (11.1)	1 (3.7)	27 (100)
	小計	5	14	13	3	3	38

注) () 内は年齢構成比 (%)

第4表 野菜を買うときのポイント¹⁾ (大型店と生協)

区分	回答区分	調査対象者の年齢					全体
		20代	30代	40代	50代	60代以上	
大型店	新鮮さ	94.6%	96.2%	97.6%	94.5%	90.0%	94.9%
	価格	70.6	80.1	76.0	52.0	36.8	70.0
	見た目のよいもの	3.0	7.6	5.5	13.7	4.4	7.1
	産地	11.8	3.9	0	11.8	11.5	6.3
	有機等の農産物	32.4	43.2	37.3	54.4	44.6	42.6
生協	新鮮さ	83.4%	95.5%	100%	100%	100%	96.3%
	価格	66.7	78.8	88.9	66.7	25.0	78.0
	見た目のよいもの	33.4	0	0	0	0	3.7
	産地	0	9.1	29.2	66.7	0	17.5
	有機等の農産物	50.0	86.4	63.9	33.3	100	72.4

注1) 複数回答可として設問した結果

第5表 減農薬や無農薬農産物に対する関心度 (JA職員と一般市民)

回答区分	調査対象者	
	JA職員	一般市民
関心がある	14人 (63.6)	27人 (93.1)
関心はない	8 (36.4)	2 (6.9)
合計	22 (100)	29 (100)

注) () 内は比率 (%)

80%で、生協では90%以上であった。逆に、買った事がない、わからないとする人の割合は、大型店では20%弱であったのに対し、生協では数%にすぎなかった。

(2) 品質と価格

見た目や味、大きさなどの品質と価格の関係について調査した結果を第7表に示した。減農薬や無農薬農産物の品質が悪くなると、その価格は普通栽培と同じか安くすべきとする回答がほとんどであった。中でも味が悪くなった場合、約80%の人が安くすべきだとしている。また、普通栽培と同じ品質なら、価格は普通栽培と同じか高くすべきとする回答が多かった。このように消費者から見た減農薬や無農薬農産物は、品質が普通栽培と同

じであってはじめて、付加価値の付いたものとして認知される傾向がうかがえる。

(3) 農薬散布と価格決定

農薬散布と価格決定の関係について調査した結果を第8表に示した。無農薬なら割増価格でも買うとする人は、JA職員で約40%弱、一般市民では約80%であったが、適正散布のものでよいとする人は、JA職員で約40%弱、一般市民ではわずか7%にすぎなかった。価格が高くなると買わない人はJA職員の方が多く、減農薬で割増価格でも買う人は双方とも数%にすぎなかった。このように、減農薬より無農薬農産物を選択する傾向が強いが、生産現場に近い場所で生活するJA職員は、都市部で生活する一般市民より農薬を散布することに柔軟であった。

(4) 価格帯

減農薬や無農薬農産物が、普通栽培のものよりどれくらい高くても購入可能なか聞いた結果を第9表に示した。高ければ買わないとする人は生協より大型店で多く、年齢別では20代の人でその傾向が強かった。大型店や生協の別なく、約70%の人が1割~2割高なら購入すると答えた。実際に販売されている特別表示された農産

物の価格は「1～2割高い」と消費者に認識されていることや、本調査でも購入時には価格が優先される傾向がうかがえることを考慮すれば、これ以上の割増価格の設定は難しそうで、無農薬等の農産物価格は、普通栽培のものより2割増程度高が上限の価格と考えられる。しかしながら、2割程度の割高の価格では農業経営は難しいとされている³⁾ことから、今後継続的にこうした農産物を生産し消費者に供給するには、単収向上や革新的な生産コストの低減技術の開発、あるいは所得の減少分の補填が期待できる施策など、政策的な支援も必要であると考えられる。

(5) 減農薬や無農薬農産物を購入する際の不都合な点と心配な点

野菜を購入する際の不都合な点や心配な点を聞いたところ(第10表)、本当に無農薬か心配であるとする回答が約50%弱で最も多く、次いで販売店がどこにあるかわからない、直接農家から購入できない、農薬の散布回

数等の表示がない、といった順になった。

4. 農薬に対する考え方

生協の組合員に対して、農薬の使用に対する考え方を調査した結果を第11表に、農薬の危険性に対する考え方を調査した結果を第12表に示した。農薬の使用は、見た目が悪くなるだけなら使用しないとする考え方が半数以上あり、一切使用しない方がよいとする考え方も、農業経験の有無双方を合わせると30%程度あった。次に農薬の危険性に対する考え方については、作物残留や人間にも害があるからとする意見が、農業経験の有無に関わらず多かった。農業経験の有無によって異なったのは、農業経験者の方が、あらゆる小動物も死ぬので自然を壊すとする考え方が圧倒的に多いのに対し、農業経験が無い者では、必要以上に農薬を使っているのではないかと感じていることが多い点であった。使用基準を守れば悪いことはない、とする意見は農業経験の有無に関わらずきわめて少なかった。

第6表 無農薬や有機農産物の年齢別購入頻度(大型店と生協)

区分	回答区分	調査対象者の年齢					全体
		20代	30代	40代	50代	60代以上	
大型店	積極的に買う	15.3%	15.4%	16.2%	20.9%	27.3%	17.3%
	ときどき買う	48.9	66.4	52.2	43.3	41.0	51.5
	1～2回買った	33.9	8.7	8.7	18.2	12.6	14.6
	買ったことがない	5.9	13.1	13.1	15.0	22.4	13.0
	わからない	6.1	2.5	2.5	2.7	3.9	3.9
生協	積極的に買う	0%	43.9%	27.8%	33.3%	0%	27.2%
	ときどき買う	66.7	51.6	56.6	66.7	50.0	59.8
	1～2回買った	16.7	4.6	11.1	0	50.0	9.3
	買ったことがない	16.7	0	5.6	0	0	3.7
	わからない	0	0	0	0	0	0

注1) 複数回答可として設問した結果

第7表 普通栽培と比較した減農薬・無農薬農産物の品質と価格

品質の変化	品質の変化に伴う価格		
	安くすべき	同じでよい	高くすべき
見た目が悪くなった	40%	59%	1%
	27	73	0
味が悪くなった	86	14	0
	83	17	0
大きさが小さくなった	49	50	1
	56	44	0
普通栽培と同じ品質	10	69	21
	5	63	32

注) 各項目の上段の数値は大型店、下段は生協の数値

第8表 農薬散布と価格(JA職員と一般市民)

回答区分	調査対象者	
	JA職員	一般市民
無農薬なら割増価格でも買う	36.3%	79.3%
減農薬 ¹⁾ なら割増価格でも買う	4.5	3.4
適正散布のものでよい	36.4	6.9
価格が高くなるなら買わない	22.7	10.3

注1) 農薬を1回散布した場合

第9表 減農薬や無農薬農産物に対する年齢別購入可能な価格(大型店と生協)

区分	回答区分	調査対象者の年齢					全体
		20代	30代	40代	50代	60代以上	
大型店	5割高で買う	0%	2.7%	0%	1.8%	3.4%	1.6%
	3割高で買う	10.0	3.7	1.6	6.5	5.5	4.8
	2割高で買う	28.1	35.0	30.0	35.0	31.8	33.6
	1割高で買う	30.6	45.5	48.5	38.5	41.8	43.1
	高ければ買わない	31.6	13.6	20.1	18.3	11.0	17.2
生協	5割高で買う	0%	0%	0%	0%	0%	0%
	3割高で買う	25.0	25.8	18.8	33.3	0	20.7
	2割高で買う	0	47.0	31.3	0	25.0	29.8
協	1割高で買う	41.7	27.3	37.5	66.7	75.0	41.3
	高ければ買わない	33.4	0	12.5	0	0	8.4

第10表 減農薬や無農薬農産物を購入する際の不都合な点や心配な点¹⁾(JA職員と一般市民)

回答区分	調査対象者	
	JA職員	一般市民
販売店がどこにあるかわからない	18.2%	37.9%
直接農家から購入できない	9.1	37.9
本当に無農薬か心配である	45.5	48.3
農薬の散布回数等の表示がない	13.6	31.0
見た目が悪い	13.6	0
特になし	18.2	10.3

注1) 複数回答可として設問した結果

第12表 農薬の危険性に対する考え方¹⁾(生協組合員)

回答区分	農業経験の有無	
	有	無
作物に農薬が残っている	72.7%	77.8%
虫や雑草を殺すので人間にも害がある	72.7	63.0
発ガン性がある	27.3	25.9
必要以上に農薬を使っている	36.4	51.9
あらゆる小動物も死ぬので自然を壊す	81.8	40.7
使用基準を守れば悪いことはない	0	3.7
よくわからない	0	7.4

注1) 複数回答可として設問した結果

第11表 農薬の使用に対する考え方(生協組合員)

回答区分	農業経験の有無	
	有	無
農薬の使用は仕方ない	0%	3.6%
見た目が悪くなるだけなら使わない	77.8	50.0
一切使用しない	22.2	39.3
わからない	0	7.1

摘 要

食品の安全性に対する関心の高まりから、減農薬や無農薬といった特別表示のある農産物が増加しているが、消費者が野菜を買うときのポイントとしてあげた基準は、有機等の農産物という質的な面より、安い方を優先させているという価格面の評価に基づくものであった。有機等の農産物が優先される条件としては、普通栽培と同程度の品質が保証されている場合で、このときの価格は普通栽培のものより2割程度割高となってもこれを妥当な価格として受け入れる意識があるようであった。

現在の農業生産を進める上で農薬は、病虫害や雑草を効率的に、しかも経済的に防除するためには欠くことの

できない資材であることは言うまでもないことである。しかし、農薬の使用に対する消費者の考え方は、人間にも害があり、自然を壊すから使用しない方がよいとする考え方が強く現れており、使用基準を守った農薬散布を行っても良いとする意見はきわめて少なかった。

以上のように、消費者の意識は、農薬の使用については否定的な考え方が強く現れる一方で、有機・減農薬・無農薬農産物そのものについては高い関心を示すが、その質や価格面については、これを積極的に評価してこれらの農産物の生産を支援しようとする姿勢にはやや欠けると言った矛盾を含んだものであった。

引用文献

- 1) 農林統計協会(1992) 図説農業白書平成3年度 34.
- 2) 農水省消費経済課(1992) 平成3年度食料品消費モニター第1回定期調査結果 1. 青果物等の特別表示に対する消費者意識について 3~10.
- 3) 日本植物防疫協会(1993) 農薬を使用しないで栽培した場合の病虫害等の被害に関する調査報告 39.

(1994年10月5日受領)